

ふるさと風

第56号 (2011年1月)

風に吹かれて (35)

白井啓治

『来年があるさと元日の言ふ応援歌』

この一行文詩は元日のブログに書いた「来年があるさと元日の言ふ」に「応援歌」と蛇足な加筆を与えたものである。蛇足な加筆と書いたが、実に蛇足である。応援歌などと説明をする必要なんかまったくない。しかし、何をするにも長続きのできない石岡という地においては、真面目な活動を展開している人達に向けて、新年にあたって「来年もあるからね」と応援を言いたくなるのも事実である。

この会報もこの5月号を迎えると丸五年となる。しかし、会報という形のあるものを出し始めて五年という事で、内田兄、兼平妹と一緒に活動を始めたのは更に二年前になるので、もう七年の活動を続けていることになる。

「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える」という活動を始めるに至った、直接の原因は八年前(2003年)に内田兄と面識を持ったことに始まる。しかし、内田兄との面識が直接の原因にならした誘因となるのが、ある集まりで聞かされた「歴史の町なんて言ったて、歴史では飯は喰えん」であった。

歴史・文化というのは、その地域固有の知的財産であり、その知的財産が現在をなしているのであるが、にもかかわらず、歴史では飯が喰えんとはこいつ等識者面はしているが、私利私欲の尺度しか持てない姑息、身勝手な里の穀潰し野郎だな、とあきれ返ってしまったのであった。しかし、その当時は長く石岡に住むつもりもなく腹は立つたが、反抗を言う気もないお気楽な傍観者であった。ところが内田兄と面識を持ったことを原因に、私も内田兄も全く予期せぬ展開が生まれ、兼平妹を加えての町おこしを視野に入れての活動が始まったのであった。そして、私としては、ちよつと腰掛の地から終の地への覚悟をつくらせることになった小林幸枝との出会いが生まれてしまったのであった。

しかし、以前にも書いたことがあるが、ふる里起しの旗を振った者やそれを応援しようと思集まった者達は、我等が気付いて後ろを振り返ったら誰もいなくなっていた。この会報を始めてから、内田兄はよく言うのであるがあの二年間は何だったんですかね、はこの歴史の里と称する町を一言に表現している言葉である。そんなこともあって、「来年があるさと元日の言ふ」に「応援歌」と蛇足をくっつけたのである。詩詠みの雅号を持つ小生としては大層に恥ずかしいのであるが。

ふるさと風の会会員募集中!!

新年明けましておめでとうございます。

当ふるさと風の会では、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談・勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063 打田昇三 0299-22-4400
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com>

さて、暮れからお正月にかけて、水上勉氏の「一休」を取り出してきて改めて目を通してみた。その中に、「したたかなる反抗こそが己を救い、国を救い、暮らしを創る」ことを再認識させられた。それは、一休宗純の十六歳頃に詠んだとされている詩を読だときであった。その詩とは、
法を説き禪を説いて姓名を挙げ、
人を辱しむるの一句聴いて声を呑む。
問答もし起倒を識らずんば、
修羅の勝負、無明を長せん。
…である。

この詩を読みながら、変化や既成を打ち破るためには、したたかな反抗が大事であり、したたかな反抗こそが己を救い、国を救い、ふる里に暮らしを創る、と改めて認識させられたのである。

それで、小生、年頭にあたつて改めて自身に言い聞かせたのである。「したたかに現在に反抗し批判することこそが明日に夢を持つ者の役目である。したたかに反抗し批判することによって明日への夢としての物語を紡ぐこととなり、次代に残すべきものが見えてくるのである」と。

したたかな反抗とは、ちよつとやそつとのことでは絶対に退かないということである。自分はこの思う、こう考えたと断言することである。意固地になるのとは違う。それは、大層にエネルギーの要することではあるが、一瞬の変化を望むのではなく「来年もあるさ」と言い聞かせ、したたかに反抗することである。だから、蛇足とはわかつてはいるが、敢えての「応援歌」の加筆を与えたのであった。「来年もあるさ」と考えれば、今年はずっといいことがあるに違いないと思うのであるが、顧みるのは今年の師走は大晦日の事である。

卯年の憂い

打田昇三

中国の古書に由来する「駟の隙を過ぐるが如し（しのげきをすぐるがごとし）」と言う諺がある。四頭立ての馬車が、ちよつとした隙間を過ぎる間のように歳月が経過すると言う意味らしい。それ程ではなくても月日の経つのを早いと感じる方は多いと思う。近年は時代の変革が急であるから、余計に

そのように思われるのであろう。そうなる何もせず居て一日が長いとおっしゃる方は幸せなのであろうか：飽きっぽい私は嫌だが：

「ふるさと“風”の会」も会報を発行するようになって既に五年目の半ばを過ぎたということ。会員一同（と、言っても六名しかいないが）は馬車ほどでは無くても、愛犬が散歩するぐらいの速度で歳月の早さを実感している。

振り返れば寅年の昨年は日本も猛然と走り出して景気の良い年になると期待していたのだが、景気が良かったのは何もしない政治家と悪さばかりする一部の官僚だけで、国民は「虎の威を借る狐」のような連中に「虎を画いて狗に類する」ような偽政策で騙され「虎を養いて患いを遺す」ような社会を形成され、日本を「虎の尾を踏む」ような危なっかしい国家にされ、身近に「虎」を感じたのは「リストラ」だけ、と言うお粗末であったのは何とも情けない。尤も、こういう国家にした責任は過去の歴代チンピラ政府・政党にもある。

国のリーダーが虎の調教に失敗した後が卯年である。猛獣の虎が駄目だったものを可憐なウサギちゃんに託すのも無理かとは思いますが、何とかして乾坤一擲（けんこんいつてき）大日本帝国では無く、其処に住む兎のようなかわい国民が安楽に暮らせる社会にして頂きたい。多種多様な動物の中から僅か十二種類しかない代表に選ばれたのであるから、それなりに何かを期待するしかない。

西暦と年号とを併用している日本では記入させる側の判断で日付を書かされるから時に迷ったり過去の年代を思い出すのに苦労したりするので、年号は無くても良いように思うが、そうなる「俺は明治生まれだ」などと概念的に年代を表現出来

なくなり、何と無く味気なくなるかも知れない。そう言う意味では「十二支」も年代を決める重要な要素として連綿と続いている。

暦の上では「十二支」の前に「十干」つまり「木・火・土・金・水」を兄（え）と弟（てい）に分けた「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」が付くから毎年の干支は六十種類になり、六十年で「還暦」を迎えることになる。二〇一一年＝平成二十三年は干支（えと）が「辛卯（かのとう）」になる。金の兎であるから、と安心するのは早計で、昨年は金の虎（庚寅）でもダメだった—金の虎は、身体が重すぎて十分な活躍が出来なかったのだと納得すれば別だが：もう一つ気がかりなのが「十干・十二支」は古代中国から伝わってきた暦法であることで、昨今の中国の行動を見ると十二支の中に「熊・狐・狸・鼬」から「鰐・蠍・雀蜂」など、人間を騙したり危害を加えるような動物も入れかねない。

残念なことだが日本の歴史は征服者により先住民の歴史が消された上に、一部の支配階層の都合が良いように多年に亘り改竄（かいざん）が行われてきたから真の古代を知る術が無い。干支が何時ごろ日本に伝来したのか記録は無いが、神話に残る神武天皇の即位年代が「辛酉（かのとり）」となっていて、これを昔の学者が何を血迷ったか西暦紀元前六六〇年に当てはめた。

紀元前六六〇年代は唯一の大国だったエジプトがアッシリアに占領されており、イラン高原では後にペルシアに滅ぼされるメディアがアッシリアを苛めていて、ローマは未だ田舎者、ギリシアは都市国家の形成期、鉄の王国ヒッタイト滅亡後の小アジア（トルコ）では王国リュディアがギリシアとの協力で商売に励み世界一の金持ちになったば

かり、中国では諸侯が争う春秋時代である。

その頃の日本は「縄文時代」の後期であろうけれども何しろ歴史が消されてしまったばかりか、昔から日本列島に住んでいた人々は「蝦夷（えぞ、えみし）」などと呼ばれ、迫害されて北へ北へと追い詰められた。その理由は「言語風俗が違い、服従しなかった」為であると言う。突然にやって来た、どこの馬の骨とも分からぬ奴らに「言葉が違ふ」と文句をつけられ「服従しろ！」と強制されても「分かりました」と言える道理が無い。それを押し付けたのが弥生人である。

十年ほど前にNHKが「日本人はどこから来たか」という番組を放映した。その中で「稲作のはじまり」について、従来は発祥地を中国・雲南省の高地と揚子江沿岸部（二説）としていたが、実は日本の縄文時代早期に稲作が行われていて其の年代が中国より早い；とする事例を挙げていた。このように優れていた縄文の文化を横取りしすべてを弥生人が成し遂げたようにしたのが日本の古代史であり、それを怪しい神話で誤魔化した。

縄文時代の遺跡で現存するのは「貝塚」ぐらいのようだが、それさえも、現存保護されているものは数える程しかない。高名な古墳学者が「茨城県には海岸があり、霞ヶ浦があるのに貝塚が少なく」と不思議がっておられた。それだけ粗末にされたということであろう。そうした中で美浦村の皆さんが地元の貝塚「陸平（おかだいら）遺跡」を大切に、文化的行事やイベントなどを通じ保存意識を高めておられるのは素晴らしいことである。日本全国で確認された貝塚遺跡の数が約一八〇〇か所、そのうち四十五%弱は関東地方（と言っても海に面した地域）にあるらしい。陸平のように大事にさ

れているのは少ないであろうが：

茨城県と言うより常陸国の古代を知る史料としては「常陸国風土記」しかないが、これは荒唐無稽な神話の「古事記」と同年代に編纂されたものであり特に常陸国府に国司として勤務していた藤原宇合が編集に関わったらしいから「我田引水」は否定出来ない。そのために征服者により地元の豪族たちが「賊」として征伐される記事が多い。風土記の本来は、その地方の気候風土、特色、地形、産物、民情、信仰、伝説などを中央政府が把握する目的から書かせたものであるから征伐記事が多い常陸国は広範囲に亘り先住民族の縄文人が豊かに平和に暮らしていたことを物語っている。気候温暖、自然豊かで大地が肥沃、海山の幸に恵まれた此の地方は、やがて「常世の国」と呼ばれ、都からは遠いが弥生人の宝庫となるのである。

紀元前六六〇年の神武天皇即位は百%嘘であるが、年代を千年以上ずらして西暦一、二世紀頃になると日本の何処かに弥生系の王朝らしきものが出来てくるらしい。そこで用いられた文化的なものとは全て古代の中国又は朝鮮半島の模倣であり、先に述べた十千十二支による年代の設定も重要な記録として用いられたのであろう。しかし権力の座を巡り興亡が繰り返された為に、落ち着いた時点で肝心な建国の歴史が曖昧になってしまった。仕方がないので口承で伝えられていた天皇の年齢（実年齢では無く誇張した年齢）だけ千支を逆に振り当てていったら紀元前六六〇年に達したということであろう。納得はいかないが他に無いから神武天皇即位の「辛酉」から始めて、今年の千支に当る「辛卯」の年には、どういふことが有ったのか重要事項だけを探ってみることにする。

神武天皇時代最初の「辛卯」は即位後三十一年の紀元前六三〇年になる。この時に天皇が高い丘に登って周囲を見回したら、地形がトンボの形に似ていたので日本の国を「秋津州（あきつしま）」と命名した。トンボの別名を「アキツ又はアキズ」と言う。日本全土の地形は宇宙からでないと思えないが、神武天皇は少し高い山から見た光景を日本全土に当てはめた。大雑把すぎる天皇である。

次に記録に残る「辛卯」は懿徳（いとく）天皇の元年（BC五〇年）で二月四日に即位した。実在の可能性がある崇神天皇は即位後九年目（BC九〇）「辛卯」の十二月二十日に大田田根子に大物主神を祀らせて史上初めて「酒」を醸造し神に供えた。

この神様は神界の先駆者で石岡市の金刀比羅神社主祭神でもあり、龍神山に伝わる「蛇神伝説」の元祖「酒造の神」でもある。八幡宮でお馴染みの応神天皇は即位の翌年（西暦二七〇年・辛卯）に景行天皇の曾孫・仲姫を皇后に定めた。

神話時代を過ぎると少し実在性は高くなるが今一つ身元がはっきりしない継体天皇は、その為に各地を転々とし、西暦五二一年「辛卯」十月にも新しい都に遷都している。そして次に、大日本帝国草創期の大物に「辛卯」生まれの代表として登場して貰う。「壬申の乱」の勝者であり、持統天皇から聖武天皇を経て称徳天皇に至る皇統を創り、伊勢神宮、熱田神宮などの神威を高め、藤原氏の繁栄を許し、子孫の聖武天皇に中国を真似て大仏や諸国国分寺などを建立させるに至った大人物である。その名は大海女皇子こと天武天皇という。生まれたのが舒明（じゅめい）天皇の三年（六三二）と推定されており、正に「辛卯」の年である。中大兄皇子こと天智天皇は藤原鎌足と共謀して

起こした「大化の改新」というクーデターにより
応神天皇系とも思える蘇我氏の王朝を倒して事実
上の初代天皇になった。それを天武天皇が奪った
形なので政権基盤が弱かった。そこで伊勢神宮な
どの神威を利用して天皇を神格化し集権国家にし
たのが天武天皇であると言われる。

ところが天武王朝では天智天皇に協力した藤原
鎌足の功績が否定される形なので、出世コースに
は乗っても藤原一族が祖先に対して抱く内心忸怩
(ないしんじくじ)たる思いは消えない。つまり皇統
が天智系でなければ喜べないのである。それを実
現させたのが国司として「常陸国風土記」を編纂
した藤原宇合の子・藤原百川であり天智系の末流
として暗殺を逃れた「桓武天皇」を即位させるこ
とにより皇統が天智系に続くようにした。

桓武天皇と言えば思い付くのが平安遷都と桓武
平氏である。平安京は「鳴くよ(七九四)鶯…」で
戊(七)年であるが、実は、その七年程前の年にも
遷都が決められていた。京都市より少し西南の大
阪府高槻市と枚方市に近い「長岡京」である。

遷都の詔勅が下されたのが延暦六年丁卯の年であ
り比叡山延暦寺が創建される前年のことである。
これが順調に行けば、其処が平安京になっていた
のだが、権力闘争が絡んで反対派が居り、長岡京
建設責任者の藤原種継(百川の甥)が暗殺されてし
まったために、急遽、候補地が現在の京都に替え
られたのである。なお平安京建設の目的は東北方
面に抑え込んだ縄文系の人々の反乱を抑える為に
天皇の権威を高めることであつたらしい。

こうして見ると「卯」の年というのはなぜか国
の大事に関わることが多いような気がする。元氣
不足の来年の為に、少し勇ましい人物にあやがる

つもりで有名人の干支を調べたところ、次に挙げ
る武将たちが意外にも「卯年」の生まれであつた。

八幡太郎義家(長暦三年・一一一八・己卯)

左馬頭義朝(保安四年・一一二三・癸卯)

征夷大将軍・頼朝(久安三年・一一四七・丁卯)

検非違使判官・義経(平治元年・一一五九・己卯)

平家には居らず、清和源氏を代表する人物ばか
りであるが、天下を取った頼朝以外は名前が知ら
れていても運勢が良く無い。新年早々それでは困
るので、源氏系の徳川幕府を代表して、この方に
登場して貰う。西暦一六〇三年、慶長八年・癸卯
は徳川家康が征夷大将軍に任命され徳川幕府を開
いた年であるが、その年に生まれたのが家康の末
子である徳川頼房、言うまでも無く水戸黄門の父
で水戸藩祖、従三位・中納言となる人物である。

頼房の生母は桓武平氏良文流の血を引くという
正木氏・お万の方である。紀州藩主となる頼宣も
お万の方が生んだのだが、弟の頼房は家康の命令
により幼くして英勝院の養子となった。家康との
間に生まれた女兒が夭折して悲しむ英勝院に家康
が配慮したのである。英勝院お勝の方(お梶の方
は太田道灌の子孫で家康に「もし男子と生まれ
れば一軍の将となる者で、惜しむべし」と言わ
せた女丈夫である。関ヶ原合戦には騎馬で家康に
従つて戦場に出かけて行った。家康が江戸城を秀
忠に任せて浜松に隠居した際には、家康に連れ添
っている。頼房は、その英勝院に養育された。

三代將軍の継嗣問題から、江戸城を抜けだして
嘆願に来た春日の願いを家康に助言したのは
英勝院である。三代將軍・家光は春日局からその
ことを聞かされていたから頼房の養母となつて水
戸に来た英勝院と水戸藩のことを特別に配慮して

くれたのである。家光が「参勤交代」の制度を設
けた際に水戸藩(支藩を含み)を除外してくれたの
は、其の恩に報いたのだと思う。ただ、藩主が英
勝院の養子になったことで「徳川御三家」として
の水戸藩は、官位や禄高などで尾張、紀伊の両藩
とは格差が生じたことは否めない。英勝院は仏門
に入つて鎌倉に一寺を開き、徳川光圀は娘の一人
を出家させて英勝尼の後を継がせた

英勝院は寅年であるが、正に虎に相応しい活躍
をした女性である。こういう人物が現代に居れば、
寅年のついでに卯年まで面倒を見て二〇一一年・
卯年を何とか元気にして貰えたかも知れない。

二〇一一年の前の「辛卯」は昭和二十六年(一九
五二)であり、この年は「サンフランシスコ条約」
「日米安全保障条約」が締結され日本が占領国の
束縛を解かれて独立した記念すべき年である。
あれから六〇年、現在の日本は何処かの国に占領
して貰つたほうが良さそうな状況になった。

その前の「辛卯」は明治二十四年(一八九二)で
大隈重信、板垣退助、松方正義らが政党による議
会政治を模索した。現代はその議会が建物だけ立
派で、源平時代のように権力争いに終始し日本を
ダメにしている。兎は仮眠している間に時間の馬
車に過ぎられて亀に抜かれた。政治経済が仮眠中
の「辛卯の年」…日本はどうなるのだろうか。

《ふ》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・蕎麦会席料理の

お店です(キター文化館通)

看板娘(犬ウニちゃん)が皆さんを

お迎えいたします。

電話090-960-476-000000

明けまして……。特におめでたい訳でもないから、
ま、今年も健康に気をつけ、やりたいことに情熱
を燃やして、楽しく励んでいきたいと思えます。
明るい雰囲気は、周りが作ってくれるものではな
く、自分から醸し出していくべきものなので……。
……と、年頭に当たり、心穏やかに、さわやかな
スタートを心がけたのに、この一年を振り返って
みると、腹立たしいことが多すぎた。

惑星探査機「はやぶさ」の快挙やノーベル賞受
賞の喜びはあったものの、国際情勢は、静かなお
正月どころではない。一層、緊迫度が増して東ア
ジアは不穏な空気が漂っている。正月早々、ツベ
コベ言いたくはないが、ノホホンとして心にもな
いお世辞など言っている場合ではない。近隣大国
の覇権主義。ミミッチイ領土拡大主義。崩壊寸前
の世襲王朝が、最後の「あがき」みたいに、かん
しゃく玉を破裂させる。ウカウカしていたら、い
つ、テポドンが飛んでくるかもしれない。

だというのに、わが国会をみると与野党が、醜
い言葉で罵り合っている。内輪もめしている時で
はあるまい。与野党一致団結して、この国難を乗
り切らねばなるまい。帝国議会開設から120年の節
目の年だというのに。これまでに何の成長の跡も
見えない。憲政の神様罌堂翁が泣きますぞ！

情けなや、いつも自虐史観に苛まれる。それど
ころか、それ問責決議案だ、やれ審議拒否だと、
小さな穴の中で、小粒な虫同士が角突き合わせて
いる。足の引つ張り合いほど醜いものはない。

スケールの雄大な大物政治家など、近年とんと
聞いたことがない。総理はまるで消耗品のように、

クルクル変わる。8年ぐらい堂々と居座り、世界
に睨みをきかせるくらいのことのできないのか。
先の温暖化防止の京都議定書は、全人類の安定的
繁栄に必須だ。にも拘らず、目先の経済にのみ目
を奪われ、最大の排出国なのに、ズルをして逃げ
出したアメリカ・中国・インドなどは許せない。
日本の総理は、こんな狭量の国々を、どやしつ
けるくらい器量を持つてほしい。全人類の未来
を見つめた、先見の明を持った「世界の重鎮」と
して君臨してほしい。

話を戻し、そもそも国会において審議をしない
のなら、議員など要らないだろう。醜議院だか、
衆愚院だか知らないが、あの低俗な唯（いが）み
合いには、ホトホト呆れて開いた口がふさがらな
い。国会が不毛の非難合戦の応酬に終始している
ようでは、外国に付け入る隙を与えるだけ。北方
四島など帰りっこない。尖閣諸島も狙われる。

究極は、「衆参両院」を一つにまとめ、議員数と
その報酬をそれぞれ3分の1ぐらいにし、自らを
事業仕訳して範を垂れるべきである。そしたら、
国民も納得し、諸々、心から協力するだろう。

【私のパソコンは、殆ど病気で、漢字変換が、
ろくにできない。祖父は祖父と出るし、美容院↓
病院。官吏↓奸吏。下着↓舌技。詩人↓私人。そ
して、農民・農協と打てば、脳眠・脳狂と出る。】

そろそろ小生も、いい歳をして、吠え止まりを
……と考えていたが、世の中がこうも不穏だと、ど
うしても黙っていたら、世の中がこうも不穏だと、ど
うしても黙っていたら、内にも秘めた闘争本能とでもいうの
ではないか。チツポケな正義感だが、枯れそうで
枯れない。私は政治には興味が薄く、市井の片隅
の平凡な市民なのに、歳をとったら包容力が萎え

てきて、政治のうす汚さにはこの頃、腹が立って
我慢がならない。高齢者がシャシャリ出る幕でな
いことは、分かっているのだが……。

* * * * *

私はかなりの単細胞なので、若い時は、まさか
21世紀を迎える頃は、世の中はもつともつと良く
なっているものと、固く信じていた。

こんな曲がりくねった細い道で、いつも渋滞。

21世紀ともなれば、当然真つすぐで、安全で快適
な道に改良されているだろう。社会の底辺で、汗
水流して働きずくめ。身も心もズタズタに疲れき
って年老いていく。しかし老後は何の保障もない。
そんな不合理がいつまでも続く訳がない。政治や
行政がキチンと整備されるはず。職がなければ、
皆で分け合って、貧しいながらも最低の生活は保
証される。腐敗や不正は影をひそめ、世の中が、
もつと明るく公正で、社会正義が貫かれ、はるか
に住みよくなっているはず。そう固く信じていた。

ところがいざ21世紀の幕が開いたら、なにも変
わりはしない。むしろ以前より酷くなった感じ。

ウォール街の野獣どもが暴れまわり、世界経済を
混乱に陥れる。それが他国のこんな田舎にまで、
もろに響いてくる。自由競争時代とか成果主義
だとか、まるで弱肉強食の荒野にホッポリ出され
たみたいで、見るも無惨だ。機転が利き、時代の
波にうまく乗れる人は、ほんの一握り。職を失い、
家族を養うことができず、やむなく路上生活。リ
ストラはされなかったが、超過酷なノルマを課せ
られ、不眠不休で過労死。うつ病↓自殺。21世紀
が、こんなみじめな状態とは夢にも思わなかった。

個人の生存の権利さえ保障できないで、何が世界に冠たる平和憲法ですか？

あまりにも低い透視力。未来予測の甘さ。今更、己の愚かさに気付いても、後のまつり。己の愚かさを棚に上げ、こんな世の中を創った代議士とやらに恨み心髄。年金と退職金の利息で老後は暮らせると読んでいたのに、利息はハナクソにも満たない。年金は介護保険・医療保険・税金など差し引きで、これも哀れな額。そして、世にも恐ろしい世界一の借金大國（国・地方合わせて約900兆円）。誰がこんな社会を作り上げた？ 監視機能はないのか？ 返せるあてはあるのか？

官僚の『國家が滅びても我が省庁だけが生き残ればよい』とする予算案に、まんまと丸め込まれた議員は、『ハイ、賛成』とすぐ議決。雪ダルマ式に借金を増やした。誰がその責任を取るのか？ 代議士は連帯保証人のようなものだから、彼等の財産を没収し、その穴埋めの足しにしる！ と怒り心頭。しかし、じゃあ、その代議士を選んだのは誰なのだ？ と聞き直られると、振り上げたゲンコツのやり場に困る。

今更「事業仕訳」くらいでは、大穴は埋まらない。隠れ財産（埋蔵金）を掘り起こそうとしたら、逆に「隠れ借金」が出てきた。全国民一人当たり7百万円ほどを供出しなければ、穴は埋まらない。国は破産寸前。そんな國家を作り上げた責任は、結局、無責任投票をした自分自身にあるということとを、反省したくはないが、認めざるをえない。

* * * * *

あーあ、こんな国はいやだ。逃げ出したくなる。

いつまでも長生きしていたら、どんな災難に出くわすやら。高齢者の資産は徹底的に國が吸い取る？ 氣の利いた人は、サッサとこの世と、おさらばした方が正解かも……。

それとも、どっかの無人島でも買収して新しい國家を樹立しますか？ 実篤の『新しき村』（1911年・宮崎県）ではないが、どこぞに、新天地を開拓し、眞の平和國家を樹立したい。一國多制度、それもいいじゃないですか。

【私は國際協力で、中米に滞在中、一つの國の中に、もう一つの獨立國が存在する現実を見てきた。ローマ市内に人口770人のヴァチカン市國（ローマ法王庁）があるように。それはホンジュラス國カタカマス市（人口5万人）の中に、5km四方ぐらいを塀やバリケード・裸電線で囲って、人口500人ほどの、主としてアングロアメリカ系のコチコチのキリスト教原理主義者達。地動説も進化論も全く信じない。聖書に書いてあることのみを眞実とする。スペイン語國の中で英語のみを話す。食糧は自給自足の農業が主体。農耕地に牧場。印象的だったのは、カカオの林があり、チョコレートを自家生産。文学や音楽、演劇なども自作自演のこと。そして引き込んだ川をせき止め、淡水魚を繁殖しながら水力発電。勿論立派な教會があるが、学校も診療所も、ラジオ放送局もある。テレビも車もトラクターもある。普段は全く閉鎖的だが、文化祭のようなお祭りには、ただ一つの入り口で、私共外國人は、パスポートで入村を認める。絵画や彫刻等売って生活しているらしい。法的位置づけは知らないが、オーム真理教のような破壊活動はしないので共存並立という感じ。】

さて、わが村の入村資格は、とにかく頭の良い

人はダメ。優秀な頭脳を集めた現状國家が、このように乱脈極まりない。自制能力が機能してないからだ。秀才は、違法ストレスの悪事を企む。國家建立は、鈍才に限る。少々ウスノロでお人よし。出世意欲や権力志向は、限りなくゼロに近い人。

衣食住がかるうじて満たされればそれでよい。贅沢が環境を汚染し、資源を枯渇させる。食糧は自給自足が当然。辛うじてその日が暮らせればそれでよし。暖衣飽食は厳禁だ。効率的生産・販売など考えるから、人間の本能で、すぐ偽装や詐欺行為に走る。農機具や日用品を生産するささやかな工場は必要。衣料品は天然素材で、肌優しい。住宅は雨風が防げればそれでよし。農耕と、少数の牧畜。密植や、密飼をしなければ、動植物は、めったなことでは病気になるもの。金を儲けようとして狭い所に密植し、狭い小屋で家畜を密飼するから、互いにストレスで、生理機能が狂い病気になる。自然に抱かれた、おらかな環境下では、植物も動物も、そして人間も実に健全に育つ。風光明媚なところに英雄が育つ。縄文人が狩猟採集で生活したように、その日その日が、何とか生活できればそれでよい。

【3000年前、日本列島には約10万人の縄文人がいたが、今、縄文人骨約400体を調べても、結核によるカリエス痕は見つからない。しかしすぐ後100万人も大陸から押し寄せてきた弥生人骨からは、大量に結核によるカリエス痕が見つかっている】

さて村の必要な施設は、役場・学校・診療所・発電所・文化センター・それにささやかなお店と銀行の支店でもあれば上々。大統領は、当番制か籤引。皆が順番に責任を持つ。そうすれば、國家を破産させるような向こう見ずの借金を重ねたり

はしないだろう。憲法とか法律とかは、悪者が己の利を貪るからそれを禁じるためにやむなく設けた制度であって、皆が話し合いで決める共同体は、そんな難しい法律など所詮不要なものだ。知恵ある長老の顧問でもおれば、大方、片が付く。

証券市場も為替市場もインターネットも要らない。そんなものが、この欺瞞社会を作り出した。最悪はウォール街の、何か良いものはないかと目をきよるきよるしているハイエナどもだ。そして、それに追いつけ追い越せと焦っている世界各地の無知蒙昧どもだ。国際ルールも社会道義もありやしない。ただエゴあるのみ。環境汚染・資源枯渇・所得格差・人権無視など、矛盾だらけで、いずれそのうち、既存の国家は内部崩壊……。こんなガンジガラの窮屈な国はもうゴメンだ。もっとおそろからで、のんびりとした国家を目指して、同志を募り、独立国を樹立するほかない。さあ、この指に泊まる人はおらんかね。

* * * * *

邱永漢の書に『民主主義はコストがかかる』と書いてあった。確かに国家が道路や鉄道を整備し、大規模な工場地帯や市街地を造成しようとしたら、民主主義国では、既住者に有無を言わず強制立ち退きなど簡単にできっこない。個人の権利が、まず尊重されなければならない。近代化を目指し、効率的な大改革など、まず至難の業だ。

しかし、一党独裁の全体主義の国なら、国家百年の計で、社会資本としての鉄道・道路・空港・港湾など、巨大インフラ整備は朝飯前だ。個人の居住権も財産権もあったものじゃない。先進国に

追いつけ追い越せ！ 号令一下驀進だ。

一方、日本の成田空港が何十年たっても整備しきれない状態は、民主主義国家の泣き所。国家権力でゴリ押しというわけにはいかない。民主主義はコストがかかる。その点、中国のオリンピックのための突貫工事など正に極端な対比であった。

両者のどちらが良いとか言っているのではない。この差の大きさに驚くばかりである。日本は民主主義の道を選び、ある年数も重ねた。それなりの経験もあり、経済力も一応他国を援助できるまでに発展を遂げた。10数年前までは毎年ODAの海外援助予算は一兆円を超していた。それが円借款を供与していた国に、オイルマネーを蓄えた国の原発注競争に、遅れを取る始末。縦割り行政で、バラバラに売り込みをしても、相手のハートを射ることはできない。国家が一丸となってセールスに拍車をかける国にはかなわない。韓国では、美少女のアイドルグループが国家戦略として、自国の製品を売り込みに日本へ上陸してくるといふ。フランスは中国を、ノーベル平和賞では、表向き人権問題を非難しつつも、エアバスを何十機も買ってもらえるので、笑顔ホクホク。

中国には、タマゴの殻に穴をあけ、中身を吸い取り、代りに何やら液体を詰め替え、穴をわからないように塞ぎ、堂々と売りに来る天才詐欺師もいるという。そんなヒマがあったら、他の金儲けを考えたらよさそうなものなのに。なにしろ四足なら、机以外は何でも食べる。空を飛ぶものなら、飛行機以外は何でも食べる……と言われるお国柄。四千年の歴史を誇る食品の騙しのテクニク。芸術的とも言える偽装工作。日本でも産地偽装やら、羊頭狗肉の話は、しばしば聞くが、元祖をたどれ

ば、あちらが先進国かも。

* * * * *

世の中は、裏と表があるということ。小学生でもわかるような道理が、通らないのが世の中。みんなエゴで貫かれている。古希を過ぎて今更、こんな社会の不合理に腹を立てているなど、小生も相当の単細胞。寛容力も衰えたか。人間の本性は決して綺麗ごとでは済まない。性悪説こそ真実などと喚き出す。となれば、こんな世の中、捨てつちまえ。同志が集まって別の世界を作ればよい。

正月の屠蘇に悪酔いしたか。新年早々、こんな乱暴な悪舌を叩いては、小生の品格など、屁ほどもない。だが何とか息のあるうちに、ユートピア世界を作りたかっただけ。貧乏でも底抜けに明るいラテンアメリカの人々のように。明日のことは知らない。今日一日が明るく楽しめれば、それでよい。刹那主義のどこが悪い？

浮世離れした寝言みたいなことを、クダクダ述べたが、要は、「果報は寝て待て」では、決して夢は実現しないということ。自分達で一念発起、仮想現実を作り上げていくしかないのだろう。

暮れの12日に土浦駅前の県南生涯学習センターで、美浦村の「劇団宙々」の会」による創作劇「信太の小笛」三幕を観劇した。小学生から障害者を含めた村民あがりの老若男女。あの迫力ある熱演に拍手が止まらなかった。私もラストシーンなど涙が止まらなかった。皆で盛り上げようとするあのエネルギーに圧倒された。我が石岡でも、あんな大きなうねりを引き起こしたいもの。誰かが旗を振れば、気が向けば覗いてみるよ……ではな

く『自分達もやってみよう』と、とにかく皆で腰を上げることだ。一人の夢はただの幻(まぼろし)。みんなの夢は、現実となる。春の芽吹きは、冬の厳寒を耐えたからこそ、華やぐのであろう。

やれ打つな たまの発言 無言居士

たかはま

鈴木 健

いま高浜といえば、JR高浜駅からいずみ荘あたりまでの街並みを思い浮かべることになります。が、奈良時代も同じだったのでしようか。

国府は一国の政治や経済の中心地なので、みなと(津)をもっていることが多く、それが地名として残っていることもあります。例えば、小田原市の国府津は相模国の国府の津でした。国府はコフとも読まれコウと言われていたのです。塩釜市香津町も陸奥の国府津の遺称であり、大阪府泉大津市の高津(タカツ)も、もとはコウツと読み、国府津の転字といわれ、和泉国国府の津があつたところ。高浜も常陸国府の港のあつたところ。その地名は高津と同じような変遷をたどつたものと思われ。つまり、最初国府(コウ)ノ浜と書かれ呼ばれ、次いで高(コウ)ノ浜となり、高浜(コウハマ)↓高浜(タカハマ)となつたのではないでしようか。高浜の東隣の東田中に室町時代の高野浜城址があります。これを地元では、タカノハマジヨウではなく、重箱読みでコウノハマジヨウと呼んでいます。また、下館には国府浜市衛門という人物がいました。ともに高の浜に重なります。

また、つぎに見るように、高浜は、景勝・行楽の地でもありました。高浜が国府津でなく国府浜につながることもその反映かもしれません。それは港もそのなかに含む広い海岸の名称だったのでないでしようか。

そのなかの港の所在については、一〇〇年ほど前まで大きな問屋が軒を連ね、大型船が出入りしていた高浜神社近辺の恋瀬川筋、という先入観を持ちがちです。しかし、古代の港の条件としては、四季を通じて強風をさえぎることができるところ。及び、陸上運送の負担を少なくできるところ。の二つがあげられるのではないでしようか。そのような条件に照らしてみると、その一帯は、高浜台地の南崖を北に背負い、夏や台風期には南風がまともに吹きつけ、秋冬は西風の吹きさらし、春は東風の通り道と最悪です。また、荷降ろしをして国府に運ぶとなると、どうしても急坂を運び上げる苦労が伴います。それに、国衙が石岡小学校の地にあつたのであれば、港は国道6号の恋瀬川橋付近に設けるのが合理的です。つぎに風土記に見える高浜の景観等ですが、これも残念ながらこの地は不合格です。「信筑(しづく)の川と謂(い)ふ(恋瀬川)。源は筑波の山より出で、西より東に流れ、郡(ごほり)の中(うち)を経歴(へめぐり)りて、高濱の海に入る。」「それこの地(ところ)は、花の春、紅葉の秋、駕(のりもの)を命(おほ)せて向ひ、舟に乗りて遊ぶ。春は則ち浦の花千(ちぢ)に彩(いろどり)り、秋はこれ岸の葉(もみぢ)百(もも)に色づく。歌へる鶯を野の頭(ほとり)に聞き、舞へる鶴(たづ)を渚(なぎさ)の干(みぎは)に覧(み)る。」「常陸国風土記」茨城郡ではまだまだ高浜礼賛が続きます。夏の朝夕は冷を求めて男女が浜辺を駆

けて来る。商人農夫は舟でやってくる。日がかけり涼しくなればみんな元気になる。恋の歌も一首。ところが、高浜台地の南崖は樹木で覆われているものの、湿潤温暖な風を受けて常緑広葉樹が卓越し、櫻や紅葉などの落葉樹の自生は確かめられません。夏宵の陸軟風も上を越し、蒸し暑さはなくなりません。では、舟が安心して舫(モヤ)うことができ、人が集い憩う高浜はどこだったのでしようか。

高浜には関戸という小字があります。これは港に縁の深い税関があつたところの意味以外には考えられません。場所は、高浜小学校裏の通称富士見台の北端に位置します。その北崖を下ると田圃になります。そこはむかし高浜の海が山王川沿いに入江となつて細まりながら入り込み、その先で袋状に広がつたところと推定されるようなところです。現在の地形からすると、ほとんど全方向からの風がさえ切られます。荷物は、関戸の役人が検査し徴税し、小舟に積みかえます。その舟は国衙の近くにある舟着き場まで山王川をさかのぼります(山王川は旧国府城から下る小川で恋瀬川の河口に合流します。通常は川幅は狭かつたと思われ、遡上は櫓や棹ではなく人が牽引するいわゆる曳き舟によつたのではないかと想像されます。その風俗は広重の『名所江戸百景』のひとつ「四つ木通用水ひき舟(1857)に描かれ、駅名としても残っています(が、古代のそれは『類聚三代格』898年の大政官符から知ることが出来ます)。というこで、ここが高浜の港だつたのではないでしようか。さきほどの高野浜城はその東岸になります。つぎに、高浜の岸辺で「春は則ち浦の花千(ちぢ)に彩り、秋はこれ岸の葉(もみぢ)百(もも)に色づく」ところといえ、その高野浜城から山王川沿いに南に続く東田中台地にか

ざられます。このようなことから、風土記の時代の高浜は、現在の山王川をはさむ富士見台、東田中あたりではなかったかと、考えてみました。

なお現在、その川は行政によって「山王川都市下水道」と定義されていて、高野浜城あたりから下流は、その名にふさわしく三面コンクリで囲われています。そこになんと鮭が遡上してきました。

○七年十二月のことでした。けなげにも、つがいの鮭が汚い霞ヶ浦を長駆縦断して汚濁の源流にたどりつき、コンクリ底の僅かな泥土を掻き散らして産卵場を作っていたのです。風土記の時代には遡上が普通だったのではないのでしょうか。「助川の駅家(うまや)あり(㊤現日立市)」「河に鮭を取る為に、改めて助川(すけがは)と名づく。俗(く)にひとの語(ことば)に鮭の祖(おや)を謂(い)ひて須介(すけ)と為す。」『常陸国風土記』久慈郡。恋瀬川上流の石岡市小幡地区にはその助川姓がかたまっています。

同じ霞ヶ浦の土浦入りに流れ込む桜川の上流筑波山麓の白井地区では、鮭川(すけがわ)㊤鮭は鮭の別字姓が助川姓を圧倒しています。どちらの姓も鮭がのぼってきていた証拠です。恋瀬川も桜川も、名前にふさわしい綺麗な川にして、鮭の遡上をみんな待ち望むことができるようになれば、すばらしいことですね。

どうしてあげた方がいいかしら

伊東弓子

子供達が独り立ちしていった今、娘達は苦労しているんだろ。息子達の体は大丈夫かなと思ったり、口にしたりしている。近くにいれば目に

ついて心配だが、合えるという安心がある。遠くにいれば考えても直ぐには手を出してやれないし、仕様がないと諦めて無事を願っている。親の思いを押し付けても不味いと心掛けている。度が過ぎるとよくないという事も肝に銘じている。住んでいる場所、家族の状況、子供達の性格によっても、対応の仕方は違う。と親(姑)の心得として学んだと思っている。

そういう矢先、友から電話があった。

「どうしてこうなったんだろう。よい方法はなかったらうか。今頃気がついたのよ」

と語り始まった。遠くへ行ってしまった嫁さんからの手紙が出て来たという。秋から冬への模様替えをしている時の事だったという。

「奥様から旅行に行ったお土産をよくいただきありがとうございます」

嫁さんから友への一枚の手紙だった。十年以上も経って今、手にして気がついた。嫁さんからみて私(友)は「奥さん」という他人の存在だったのかと思いきや悲しかったという。話は長かったが、同じ年代の共通する思いを聞いてやった。心に拘っていたせいも夢をみたという話だった。

孫が友(祖母)の後を付いてきたので一緒に歩いていったという。二人の子は女の子と男の子で、お姉ちゃんがよく面倒みて二人で遊んでいるようだ。母親(嫁さん)は何か物を取りに来て又出掛けて行ったのだとか。周りはいささか暗くどこか淋しい情景だった。二人は母親の後を追わず私(友)の近くにいる夢だったという。でも夢の中で嫁さんに会えたことはとても嬉しかったという。元気でいるのだろうか。どうしているかと思えば不安も募ってきたという。そう少しでも近づけるか

もしれないと思いい、束ねておいた一つ一つの便りを開いてみたという。

丁度十年前の秋から冬の頃にかけての便りで三十通位あったという事だった。どの便りも可愛い便箋に丁寧な文字で書かれていたという。宛名は夫婦(友)宛、差出し人は嫁さんの字で家族四人の名がいつもきちんと並んでいたという。内容はお土産のお礼とか、友夫婦を気遣ってくれる文とか、子供の具合が悪いので心配している文面だったようだ。十一月に入ると小冊子を送ってくれたそうで、必ず一言文が添えてあってその頃は届くのが楽しみだったという。本の題名は次のようなものだった。

「すぐく勉強になる本です。読んでみてください」

「子供のころにもどりと読んでください」

「お体をおだいじに。脳卒中の本です」

「老化防止のための料理ブック」

「お土産の絵手紙のお礼です」

「家庭円満になる一〇〇の方法」

「ファッションと身だしなみ」

などの内容で、親を気遣ってくれる喜びで一杯だったが、今回開いてみて少し違ったことを感じたといい。

一つ一つを手にして文字を目で追っている中に声を出して読んでいたという。短い文の中に手紙ではなく、この一つ一つは訴えではなかったかと胸に響いてきたそう。十年経った今、しみじみと心に伝わってくる一文一文に胸が苦しくなる程嫁さんの心が読み取れるようだったという。あの頃は手紙として読んでいた私だったと友は嘆く。何故あの時気付かなかったのだろう、そう思うと

合いたいそして気が付かなかった事を詫びて抱きしめてやりたいという。今となつては既に遅く、家族は壊れ、嫁さんは遠くへ行つてしまつたそう。この手紙や小冊子を貰つてから間もなくの事だつたと、親（姑）として気付いてやれなかつた自分を責めているようだ。

始めて息子夫婦、娘夫婦と親子の繋がりを持つことに直面していく時、よいアドバイスはありましか。世間でよく聞く事だが、挨拶もなく出かけ、帰つてきた事にも気が付かない。お風呂の水も流されて汲みなおす。話しする必要もない。同じ空気を吸うのも嫌になる。とあまりにも自分勝手な考えから来るような出来事が多いのを感じる。でも仲良くやっている親子（嫁姑）もいる。いやお互いに努力している人間関係を持っているのだと思ふ。などと話したり慰めたりしてみた。私も大層な助言は出来ないが、経験をもとに考え合つていこうと励ましてもそう簡単に納得出来る筈もなく、

「二度と戻ることはないかね」と涙している。

嫁さんと貴方は二本の線路だった筈よね。その上を走る電車には爺ちゃん、パパ、孫二人が乗つてたのよね。駅に着くとそこには、人生の区切りの行事があつたのね。そこで家族が一息ついたりはみんなどりしたんでしよう。電車が走っている時はみんな安心して周りの景色を見ていたことでしょうか。線路の故障だからみんな降りたのよ。修復するのに又みんな集まつてくるよ。きっと。と言つても、

「いつバラバラになつてしまつたんでしよう」と泣いている。

「親はどうしてやつたらいいだろう」と、今腕を拱いている状態でいいのだろうか。心を病んでいる。

孫さんは齒軋り噛んで頑張っているんでしよう。息子さんは余裕のない中で必死で子供達を守っているんでしよう。じつと見守つてあげようね。声がかつたら手を差し伸べてあげるのよ。重ねて言つてしまつた。口説くなつてしまつたかなと、気休めの言葉で励ました。私たちがいなくなつた頃「あんなことあつたね」と一ヶ所へ戻つて四人が楽しく語り合つている日が来るかもしれないよ。人の一生は、いろいろな顔を持つてその年代を生きていくのだと改めて思つた。

子供の頃は背伸びしてやる事が沢山あつた。家庭を持つたら必死でみんなを抱え込んで走つてきた。今自分という存在は何だろう。何かしてあげることがあるか見つけていこう。親業つて果てしなく続くのだから頑張ろう。

平成遷都一三〇〇年 木簡 兼平ちえこ

年の初めのお祝いを申し上げます
皆様には新たな目標に向かってお元気に新春をお迎えの事と存じます

飛んで 飛んで ひとやすみ
跳んで 跳んで ひと休み

ちえこ

インツプ物語のうさぎとかめのお話しは、足の

ギター文化館

明けましておめでとうございます。

本年も魅力いっぱいのコンサートシリーズをお届けいたします

2011 CONCERT SERIES

2月 6日(日)ホルヘ・カルドーソ ギターリサイタル

2月 13日(日)おがわゆみこ オカリナリサイタル

3月 6日(日)白井啓治・野口善広の朗読とオカリナコンサート

3月20日(日)鈴木大介 ギターリサイタル

3月27日(日)パパサラ フォルクローレコンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

早いうさぎさんがひと休みをした為に、歩みのろいかめさんにゴールを譲つてしまいました。生れつき優れた物でも怠けていけば、せつせと努力する人に負けてしまいますとの戒めのお話しでした。華の六十代になりますと一番にならなくていい無理せずマイペースでひと休みしながらゴールをめざそうと身体が叫んでいるようです今年もどうぞよろしくご愛読の程お願いいたします

さて、昨年十二月の当会報の続きで、平城宮資料館でのドキドキするような木簡との出会いから始めます。会館内は要所、要所にボランティアガイドの方と解説シートがおかれ万全である。

日本で木簡が資料として認知されるようになったのは、一九六一（昭和三十六）年に平城宮跡で初めて見つかったからのことで、その後五十年間で、平城宮以外全国各地の遺跡からの出土が、報じられるようになりその数、二十万とも言われ驚きである。その内の三万五千点が長屋王邸、三条大路より九万七千点、その他より六万八千点、これら出土した木簡群は、当時の暮しや社会の成り立ちを伝える貴重な資料となっている。

長屋王邸の木簡発見はまったくの偶然だったそう、一九八八（昭和六十三）年八月末、デパート建設に伴う発掘調査も終盤に差し掛かり建設工事は始まっていた。調査対象から外された敷地の端を掘削していた重機のバケットに目を止めた調査員がいた。多量の木簡を含む木屑が廃棄されようとしていた。遺物を救い出さなくてはならないと、工事をストップさせ一週間の予定で発掘調査が始まった。木屑の堆積の中から土器の破片に混じって次々と見つかる完形の木簡や、断片の木簡、鮮やかに残る文字、カンナ屑状の薄片に文字が残る削屑や断片が、泥の中に重なりあうように堆積する現場、今まで考えたこともないような空前絶後の量の木簡との遭遇であったという。

それにしてもなぜに、泥のなかで完形と鮮やかな文字が一二七〇年余りも生き続けられたのであるのか。それは、空気にも太陽にも触れず、水分のみの田畝の地中であつたからこそ生き続けていられたそうである。

現在も木簡達の眠っていた所には、平成の大型デパートが悠々と大極殿と見つめ合っていた。勿論そのデパートの地下にはまだ眠りに就いている木簡が残されているそうで、地下階はなく、しっかりと地上で地中に眠る木簡を守っているようである。

いよいよ木簡とのご対面である。木簡は弱い遺物なので保存に万全を期すため、会期中二回、展示替えを行い三期の展示期間を設け、会期ごとの展示木簡はそれぞれ約一〇〇点、三回足を運べば三〇〇点の誇大な木簡と、そこに記された天平びとの言葉たちに出会うことが出来たそうである。私が出会ったのは三期目であった。

入口すぐに、一つのケースに入った一号木簡と呼ばれるこの木簡は奈良時代の政変劇を生々しく描き出しているという。しばし、釘づけになる。

（表）寺請 小豆一斗 醬一十五升
大床所酢末醬等

（裏）右四種物竹波命婦御所 三月六日
寺は法華寺、平城宮内の役所に対し、小豆・醬・酢・末醬の四種類の食材を請求する木簡。竹波（つくば）命婦（みょうぶ）は常陸国出身の采女（うねめ）で孝謙上皇のお気に入り、側近女官。

この木簡が描く状況は、奈良時代最大の事件とも言える藤原仲麻呂の乱、直前の事態とびつたり符合する。政変があるうと、役人達は木簡を使って、日々の仕事を実直にこなしていた。

それが奈良時代の都を支えていたのであるという。この竹波命婦に注目したい、奈良の都に常陸国の女官が側近として、大活躍していたのである。

この年代には孝謙天皇の伯父である藤原宇合が常陸国の国司として養老三年（七一九）七月に赴任、

当時の国司の任期は四年から六年といわれ、地方勤務をこなし、帰任の際の宇合に常陸娘子（ひたちのおとめ）は、こう歌うのでした。

庭に立つ 麻手刈り干し 布さらす
東女（あつまおみな）を 忘れたまふな

常陸娘子と竹波命婦とはその当時としては身分こそ違っていたかもしれませんが同じ常陸国の東女としての気品と強さに私の胸は高鳴りました。もしかして竹波命婦さんは宇合さんのご推薦の方だったのかもしれませんが。また、天平びとにお会いしたいと、ときめくのでした。

参考資料 天平びとの声をきく

（平城宮跡発掘調査五十周年記念）
平城京
（平城遷都一三〇〇年記念）

お知らせ

昨年まで開いていましたことば座主催の「絵と一行文教室」を、本年1月より教室の開催を閉鎖し、新しく風のことは絵作家：兼平ちえこを幹事とする「絵と短文を楽しむ同好会」としてスタートすることとなりました。毎月第三木曜午後1時半より石岡市勤労青少年ホームにて集まりを持つ予定であります。詳しくは、下記の同好会幹事：兼平ちえこまでお問い合わせください。（0299 - 26 - 7178）

打田昇三訳「平家物語」

「ことば座」公演で兼平良雄さんが朗読される「平家物語」の巻・句を部分を追いかけ私流の私訳を書いております。今回は巻第十一・第二百二句「那須與一のこと」ですが、物語としては栄耀栄華を誇った平氏一門が源氏の勢力に押され急速に没落する合戦の段階に入りました。「第一句・殿上の鬨討」からは、かなり間が空くため、年代が飛び内容が飛躍します。朗読を聞いてくださる皆様は前後の状況が伝わり難いと思われまので、前回の「祇園精舎のこと」及び「殿上の鬨討のこと」と一部「鱸のこと」から始まって今回の「那須與一のこと」に至るまでに起きた主要な出来事の概要を平家物語の項目に従って記し、また直前の「大坂越の事」を付けておきます。

◎巻第一の三から巻第十一の三までの概要

平忠盛は刑部卿となり仁平三年（一一五三）に五十八歳で死亡した。清盛が後を継ぎ出世街道を歩み太政大臣となって天下を握った。清盛は五十一歳で病気の為に出家してからも栄華は続いた。平家一門は繁盛して子供たちは大臣・大将など高官の席に座り一族六十余人が頭職についた。安徳天皇を生んだ徳子を始め、一門の女性も皇室の後宮に入り、又は公家などに嫁いだ。そして日本六十余国のうち平家一門の地行国は半分を超えた。当然のこととして、平家に対する不満が高まる。

一方で、当時の朝廷内部は上皇（法皇）と天皇との対立が深まり、後白河法皇の立場が強化されるようになる。また延暦寺、興福寺、園城寺など有力寺院が神社を包含して神仏の威光を背景に勢力

を拡大し抗争や乱暴を繰り返していた。特に地方武士の領地と寺社領とのトラブルが多かった。

後白河法皇は寺社勢力を抑えようと近臣に兵を集めさせる。近臣たちは、その兵力を利用して平氏打倒を企てるが、裏切りにより発覚して失敗、多くの関係者が処罰された。法皇も幽閉される。

治承二年（一一七二）、清盛の娘（中宮・徳子）が高倉天皇の子を生む。これは厳島神社のご利益であると平家の信仰が深まる。治承四年、法王と清盛とが不仲となり、それに悩んだ高倉天皇（母親は清盛夫人の妹）は病気になる。清盛はすぐ、三歳の孫を皇位に就けた。（安徳天皇）

以仁王（もろちん）と高倉天皇の足が諸国の武士に對して「平氏追討」の令旨を発行した。父親・後白河法皇の意図であったとされる。清和源氏の本流で、清盛に服していた源三位頼政が関わり宇治川などで平家軍と戦うが敗北する。各地の僧兵たちは法皇に従うか、平家側かに割れる。

清盛は都を福原（神戸）に遷すが、怪しい出来事が続き清盛を悩ませる。その頃、伊豆に流されていた源頼朝が挙兵する。これは荒法師と言われた文覚の勧めとされる。平家軍は三万の大軍を差し向けたが「富士川の戦い」で敗走し、清盛は世論に抗し切れず都を京都に戻し程なく死亡した。その頃になると平家への怒りや不平不満などが巷に広まり世情不安が高まった。高倉上皇も病死。なお清盛の葬式の晩には邸宅が焼けたりした。

その頃、東国では木曾、甲斐などに潜んでいた源氏が相次いで平家打倒の兵を挙げた。甲斐源氏は頼朝に従う形をとったが、木曾義仲は源行家との関わりで頼朝に嫌われる。行家は頼朝の叔父で以仁王の令旨を配って歩いた。自尊心の強い頼朝

には、それが面白くないのであろう。木曾義仲の軍勢は僧兵を取り込み破竹の勢いで都に迫った。

寿永二年（一一八三）七月二十五日、平氏は安徳天皇を奉じて西国へ落ちることになり都に火を放った。後白河法皇は木曾義仲に保護されて「平氏追討」を命じ、安徳天皇の異母弟を即位させた。四歳の後鳥羽天皇である。

木曾義仲は都を占領したが評判が悪く、平氏追討もはかばかしく無かった。その上に粗暴の振る舞いがあったので、後白河法皇は密かに鎌倉の頼朝を「征夷將軍」に任じた。頼朝は義仲と平家とを追討するように、弟の範頼に三万五千、義経に二万五千の兵を付けて派遣した。義経は義仲との戦いに勝ち、法皇の御所を護った。翌年、木曾義仲は近江粟津で敗れた。平家は、本来の地盤である西国を目指して都を落ちたが、京都の騒ぎに乗じて福原に集結していた。それを追う範頼、義経はそれぞれの兵を率いて西へ進んだ。

寿永三年（一一八四）まず三草山の合戦、続いて一の谷の合戦が行われ、「鴨（ひよどり）の坂落とし」など激戦が展開された。平家側で忠度、敦盛、重衡、知章らを始め多くの武將を失った。嫡系の維盛は戦場を脱し、熊野、高野を流離ってから那智の沖へ舟を漕ぎ出して入水した。

平家軍は瀬戸内の島に陣を置いたが、船の無い範頼の軍は攻めることができない。その中に平家軍は四国に渡り讃岐国屋島に集結した。源義経は一旦、都に戻り、後白河法皇に奏聞して「平家軍を討ち亡ぼす」内諾を得てから、摂津国（兵庫）内で軍船を揃えた。目付役・梶原景時は「逆櫓（前進・後退用の櫓）の取り付けを提案したり、無謀な作戦に反対したが、義経は梶原の意見を無視して嵐の

海を強引に渡り四国に向かった。

(以下は、卷十一「大阪越のこと」この段は、那須與一の扇の的を射ることの伏線である)

義経軍の船は、嵐の追い風に押されて通常は三日かかるところを一日もかからず阿波の徳島に吹き寄せられた。夜が明けてから見ると平家の赤旗がひらめいている。そこを攻略して一人の武士が降伏してきたので道案内にした。その者に平家軍の情勢を聞くと「屋島に千騎ぐらい」と答えた。

そのほかは四国全土に五十、百と分散し、さらに三千余騎が伊予(愛媛)へ出向いたという。好都合である。屋島までの道のりは二日路、敵に気付かれぬうちに、夜道を進んで行くと山越えの途中で平家軍と間違えて声をかけてきた者がいる。屋島への道は、度々通って詳しいというので同行させた。話を聞くと、用件は都に残った夫人から平家の主あての手紙を持っている使者だと言う。

内容を知っているか?と問えば「源氏が船を準備しているの、そのことをお知らせするのでしよう」と答えた。義経は、その使いを捕らえて山中の樹に縛り付け手紙を奪って読むと「源氏の大將・九郎(義経)は敏捷な男なので、如何なる大風でも渡つてゆくでしょうから軍勢を分散させないでご用心下さい」と書かれていた。

翌日には屋島に着いた。平家側は既に陸上に城を構えている。降伏した武士に城の様子を聞いて見ると「城と海の間は極めて浅く、引き潮ならば馬の腹にも届きません」と言う。然らば直ぐに攻め寄せようと、高松の家々に火をかけて一気に押し掛けた。これを見た平家の女房たちは慌てて船に乗り込み、海辺では激しい合戦が行われた。

源氏は海岸に築かれた仮の内裏(安徳天皇の居所)

にも火を放った。両軍の激戦で義経の側近の武士・佐藤嗣信が戦死するなど、両軍に被害が出ている。こうして海岸には源氏、船には平家の軍勢が居て睨み合うこととなった。

(以下、朗読部分「那須與一の事」に続く)

平家物語

卷第十一・第二百二句「扇の的」

那須與一のこと

双方が合戦を繰り広げている間にも阿波(徳島)や讃岐(香川)の国内で平家側に背き源氏に味方しよう、と待ち受けて近くの山中に潜み、或いは洞窟などに隠れていた武士たちが十四、五騎、二十騎と集まって来たので、少なかった源九郎判官義経の軍勢も程なく三百余騎になった。日没になり合戦も思うようにいかなかったため双方が「今日は勝負がつかない」と判断して源氏は陸に集まり、平家は船に引き揚げた。

すると、沖あいに集結していた平家の船団の中から、優雅に飾りつけをした小舟が一艘漕ぎ出してきた。波打ち際から七、八十メートルのところまで向きを変え、船を海岸に沿って横付けにした。源氏の將兵たちが「あれは何をしているのか?」と興味を持って見ていると舟の上に、歳の頃は十八、九と思える美人の女官が現れた。名は「玉虫」という。服装は「五衣(いつつぎぬ)十一軍(じゅうひ)とこの中の桂(かぎ)だけだけを五枚重ねにした略装」に赤い袴を着けている。

玉虫が乗っている小舟には、舟べりに杭が立ててあり、その先端(頂上)には全体を紅色に染めて真ん中には金色で日輪を描きだした扇が取り付け

られている。玉虫は、それを示してから陸上にいる源氏の軍勢に向かって手招きをした。それを見た義経は側近の武士・後藤兵衛實基(ごとうひょうえ)を呼び「あれは何をしているのか?」と質問した。後藤實基は答えた。

「恐らく、この扇を射て見よ!と言っているのでしょう。ただし、大將軍(義経)が、それをご覧になるために正面に立たれ、美人の女官に気を取られている隙に、何処からか弓の名手が狙っていて大將軍を暗殺するという策略かも知れませんので、この際、大將軍は御出にならず、誰か他の者に扇を射させるのが宜しいと存じます。」

(注:義経は後白河法皇から「横非違使尉」けびいしのじよう)に任官されたので「判官(ほうがん)」とよばれた。この任官は頼朝の了承を得ておらず、それが頼朝にうとまれる原因になる)

義経が「味方の陣中に、あの的を射落とせる程の弓の巧者がいるか?」と聞けば、後藤は「弓を良くする者は多くいますが、中でも下野国の住人・那須太郎資高の子で與一宗高と申す者が居ります。特に身体が大きい訳ではありませんが、中々の弓の使い手であります」と答えた。

義経が「証拠があるのか?」と言えば、後藤は「そうですねえ:カケ鳥などを争えば三つのうち二つは必ず與一が射落とします:その様に聞いております」と答えた。

(注:この「かけ鳥」は、飛んでいる鳥を狙う競技か、賭けごとで争う場合か、二説ある)

義経は「それならば早速、與一を呼べ!」と命じて、那須與一宗高が召し出された。当時の與一は二十歳ぐらいの年齢であった。濃い紺色の生地には赤系の錦(金銀)を以て襟(えり)から褌(つま)に

裝飾した直垂(ひたれ)に武士の常服を着て萌黄色(薄緑)の糸で織り込んだ鎧(よろい)を着け、銀金具で飾った太刀を帯(ほ)き、羽を飾りに切り込んだ矢・二十四本を胡籥(やなぐい)に背負い、一本だけ特別に、鷹の羽をはぎ合わせ鹿の角で作った鏑矢(かぶら)や先端にV字型の齒を着け、音が鳴るようにした矢、通常は合戦の合図に用いた、を持ち、滋藤の弓(しげ)とうのゆみ黒漆の上を白紐で巻き上げた弓・主に名の或る武士が使った、を脇に抱え、兜を脱いで肩に止め置き、義経の御前にひざまずいた。

義経は、待ちかねたように「與一よ。あの舟に立てられた扇の真中を射通して、敵にそなたの弓の腕を見せつけてやれ！」と言った。與一は立ち上がって舟を見てから「…この様な状態では、未熟な私の腕で成功すると思えません。これを射落とすことが出来なければ今後、長く御味方(源氏軍)の弓矢の疵(武門の恥辱)となりましょう。どうか必ず成功なさる方にお申しつけ下さい！」と辞退することを願った。これを聞いた義経は激怒し、声を荒げて怒鳴った。

「何を申すか！この度、鎌倉を發つて西国へ向かった者どもは、誰もこの義経の下す命令に背くことは出来ない筈である。それに従えず、少しでも異議のある者は、さつさと鎌倉へ戻るが良い」與一は言い分も有ったのだが、これ以上、辞退すれば何を言われるか分からないし、命令に背いたとして、罰せられる恐れもある。そこで義経に頭を下げてから仕方無く答えた。「それならば、失敗することもあるかと存じますが、仰せに従い挑戦してみます」そう言つて義経の前を退いた。

程なく、縁周りを金メッキで飾り木の部分に貝殻を使って家紋をすり込んだ贅沢な鞍(くら)を置

いた丈夫そうな黒馬に跨つて與一が登場した。弓を取り直して手綱を上手に捌(さ)ぎ、波打ち際の方へ馬を進めた。味方の軍勢たちは、その凛々しい姿に「この若者はきつと、成功させるであろう」と口ぐちに言い合った。義経も勝手なもので怒鳴つたことを忘れ頼もしげに見ている。

與一は海ぎわで一旦、馬を止め射程距離が少し遠いので十メートルほど海の中へ入った。それでも扇までの距離は七十メートルほどあるように見えた。丁度、時節は二月の十八日、夕方の六時ぐらいになつている。関東地方より日没は遅いようだが昼間では無い。然も北風が激しく吹き荒れていて小舟は波に揉まれ上下左右に揺れている。当然のことだが、的になる小さな扇は一か所に留まらずひらひらしている。

無責任な見物の者たちは、平家方が船を繰り出して一列に並べれば、源氏方は武士が馬の轡(くつ)を揃えるようにして海岸に出た。その隙間から雑兵たちが覗き見ている。両軍ともに祭りのような雰囲気になり與一の動作に注目していた。

與一は馬上で眼を閉じ、八幡大菩薩、各地のご利益あらたかな神々、地元・日光の権現(当時、未だ徳川家康は居ない)、宇都宮神社の神、那須に祀られた温泉の神など一当たり次第に神仏の名を呼び出して「…どうか私に、あの扇の的を射させてください。もし、失敗したならば、この場で弓を折り、自害して果てるつもりです。神仏が私を故郷の那須へ帰させてやろう、と思し召すならばこれから射る矢を外させぬようにお護り下さい！」と暫くは心中に祈っていた。

眼を見開いて前方を見ると神仏への祈りが通じたのか、風が少し弱まつて的が定まり、弓を射る

には条件が良くなったように思えた。そこで與一は鏑矢を取つて弓につがい、十分に引き絞つてから「ここぞ！」と思うタイミングで射放した。

與一は大柄の体格では無いが、射る矢は武士が使う標準的なサイズと思われる十二束三伏(じゅうにそくみつぶせ)一束は親指以外の指四本の幅で、三伏は指三本の幅、一メートルを越える長さの矢か？であり、弓は強いものを使つている。放たれた鏑矢は辺りの海面に響く程のうなり音をひきながら、狙いどおりに的の扇の要ぎわを三センチほどのこして見事に射切つた。矢は弓勢を保つたまま小舟を越えて海中に入り、宙に浮いた扇は射られたはずみで舞い上がった。吹く風も心なしか春風のような柔らかさで扇をひらひらさせていたが、勢いを失つた扇はすつと海に落ちた。

その間は金色の日輪が描かれた深紅の扇が空中で遅い夕日に輝き、海に落ちてからは白波の上を漂つて浮き沈みする…絵にもなる様なその光景の中で那須與一は暫く海中の馬上に留まっていた。やがて、沖に並んだ三百艘と伝えられる軍船から見物していた平家の人々は舷(ふなばた)を叩いて誉めそやした。そして浜辺に集まつて固唾を呑むように見守つていた源氏の者たちは、籠(えびら)矢を入れ腰に下げて携帯する道具、那須與一は邪魔になるので胡籥に入れて背負っていた、を叩いて一斉に感嘆の声を上げた。

※(余話) この時には次のような主要人物が見物していた。

平家方(船上)

安徳天皇、建禮門院(平徳子)、平時子、平宗盛

(総大将)、その子清宗、教盛(清盛の弟)、

経盛(同)、教経(教盛の子)、知盛(宗盛の弟)、資

盛、清経、有盛(三名は重盛の子)など…

源氏方(陸上)

源義経(総大将)、畠山重忠、土肥實平、平山重

季、佐々木高綱、和田義盛、伊勢義盛など。

目付役の梶原景時らは未だ到着していない。

弓流しのこと

那須與一が、波間に漂う船上で揺れ動く扇の的を見事に射抜いたことは源氏・平家両陣営の人々に深い感動を与えた。拍手が鳴り止んだ頃に的を指し示した女官(玉忠)と入れ替わりに一人の侍が舟底から現れて扇の的が在った辺りに立った。その男は年齢が五十歳くらいで、黒い革紐で編み込んだ鎧(よろい)を身に着け、白い柄の長刀を杖にして、それを水車のように回しながら舞を始めた。那須與一の弓の美技に余程、感動したのである。さすがに雅(みやび)な平家らしい。

ところが野暮な源氏側の武士には、そういう風雅は通じない。源義経の腹心である伊勢三郎義盛が與一の後ろに来て、「…主の仰せであるから、あの男も射殺してしまえ！」と冷酷に言い放った。與一は「いい加減にしろ！」と言いたいところだが逆らうことも出来ないので返事はせずに背中に差していた矢をつがえて十分に引き絞った。鎧を着た武士であるから扇のように柔らかくない。

狙い定めて矢を放つと丁度、舞い収めた武士の身体を中心に矢が刺さったので、其の俣倒れ込んで舟底に落ちた。これを見た源氏の武士たちは、「ああよく射た」と言う者もあったが、「何もそこ

までしなくても良いのに…情けない…」と嘆く者のほうが多かった。ただし大将の義経が命じたことであるから、反対派も仕方なく義理の拍手を送った。平家方の船団は静まり返って声も出ない。

源氏方が騒いでいたので「あまりにも酷い仕打ち…」と怒った平家方から三人の武士が弓、楯、長刀を持って浅瀬に降り立ち「源氏の野郎ども、来てみるや！」と挑発した。これを見た大将の義経は「自分が馬鹿にされた！」と思つて(本当はそうなのだが)「あれは何とも癪に障る(じゃくにさわる)…海中で馬を操れる郎党(家臣)を集めて、早くあいつらを蹴散らせ！」と命じたので、武蔵国の美尾屋十郎、四郎、藤七と言う三人の仲間と、上野国の丹生(にう)四郎、信濃国の木曾仲次の都合五人が選ばれ、馬に乗って現れた。

(注:美尾屋は資料により美保谷などに、又、十郎は四郎にしているものがある)

五人(五騎)は楯の陰で支度を整えてから、先ず美尾屋十郎が真っ先に飛び出して矢を放ち敵方の馬を狙った。その矢は竹に黒漆を塗り羽を幌状にした大きめの矢で威力がある。それを力いっぱい引き絞って射放したものが、狙った馬の左胸に命中したため馬は屏風を倒すように海に倒れた。

馬上の武士は倒れた馬を飛び越えるようにして右側に移り太刀を抜き、さらに楯の陰に隠してあった長刀に取り換えて打ち掛かっていた。十郎も馬から降り、太刀を抜いて応戦したが、短めの太刀だったので「敵わない」と思い、体裁を構わず逃げ出した。追いついて来た相手は長刀を左に抱え込み、右手を伸ばして逃げる十郎の兜(鍔)に「こ」と言い首筋に垂れた部分を掴もうとする。十郎は掴まれまいとして除ける。相手は三度、掴み損じ

て四度目に、がっちり掴んできた。それを十郎は踏ん張って堪え、双方の力が加わった。その瞬間に兜の鍔が「鉢附(はちつけ)」と呼ばれる一番目の板から切れてしまった。

十郎は兜の鍔を相手の手元に残したまま逃げ出した。十郎と一緒に登場した残り四人は、海中の戦いで馬に怪我をさせる心配があったので、争いには加わらずに見物していた。十郎も逃れて其処に来て一息ついた。相手も諦めて追いかけては来ずに奪った?十郎の鍔を長刀の先に刺して高く上げ、大きな声で名乗りをあげた。映画や芝居でお馴染みのセリフである。「…やあやあ、遠からんものは音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ。吾こそは都の童(わらべ)にも名が知れたる上総の悪七兵衛景清よ! (かすきのあくしちびょうえかげきよ) なるぞ!」

名乗り終わると、景清は悠然とした態度で仲間三人が並べた楯の陰に退いていった。勇猛果敢な景清の活躍で元気を取り戻した平家軍は「悪七兵衛を討たすな!」「景清を護れ!」と一斉に叫んで二百人ほどが船から渚に上がり、楯を膨らませるようにして大きく並べ(兵力を多く見せるようにして)「源氏ども、此処へ攻めて来い!」と招いた。

この挑発にも一番腹を立てたのは、やはり源義経である。自ら命じて田代冠者信綱、後藤兵衛實基、同基清、金子十郎家忠、同親範、伊勢三郎義盛らを前後左右に置き八十騎ほどの集団で口々に喊声をあげながら平家の陣に突っ込んで行った。

挑発はしたものの平家軍は船が主力なので馬が少ない。二百人居ても徒武者(かちむしや)徒歩(徒)が大部分だったから、鼻息荒く突っ込んでくる馬と怒った義経の鼻息に恐れをなして一斉に船に引

き揚げてしまった。邪魔だったので並べた楯は放り出していったから、突っ込んでいった源氏の馬は楯だけを思いつきり撥ね飛ばした。

双方共に矢を射る違（いとま）も無く海の浅瀬が戦場となり、渚の敵を追い払った勝機を逃がさないようにと、源氏の武士たちは乗馬の腹を蹴り続けて平家船団の船べり近くにまで攻め込んだ。平家の船からは熊手や薙ぎ鎌で源氏の騎馬を引っ掛けようとする。義経の兜も何度か鏝に熊手を掛けられたけれども、周りにいた家来たちが、それを太刀や長刀で打ち払いながら攻め続けていた。

その時に、どうしたことであるうか、義経が自分の弓を海中に落としてしまった。義経は馬上でうつ伏せになり、鞭で弓を掻き寄せようとしたのだが、潮の流れがあるので中々取れない。敵兵はこの時とばかり、義経を攻撃しようとする。源氏の武士たちは、それを見て「どうか、弓は捨てて下さい。危険です」と口々に叫んだ。それでも義経は止めず、家臣たちがハラハラしている中で遂に弓を拾い上げ、笑っていた。

合戦が終わってから、老臣たちが渋い顔をして義経に言った。「…例え、千金、万金に代え難き御弓であろうとも、御大将の御命には換えられるものには有りません。それを危険な目に遭われながら無理に弓を拾われる御心が分かりません…」

義経は家臣に諭すように言った。「私は弓が惜しくて取ろうとしたのでは無い。義経の弓となれば他の者は興味を持って見るであろう。強い弓を持ったと言われる叔父の源為朝のように他人に自慢の出来る弓であれば流しても放っておくし、欲しければ呉れてもやる。普通の弓を持つ私が弓を流し、拾った者が見て“これが源氏の大將・義経の

弱弓よ”と馬鹿にされるのが悔しいから、命をかけてでも拾いあげなくてはならなかったのである。」これを聞いた家臣たちは一様に感動した。

その日は一日中、合戦が続き夜も更けたので平家の船は沖合いに引き上げ、源氏の軍は浜辺から上がって松林が群生する野山に陣を布いた。源氏の将兵は此処三日間、碌な睡眠をとっていない。一昨日は摂津国の渡辺・福島大坂を船出した後、悪天候で眠れず、昨日は阿波国勝浦に着いて直ぐ合戦があり、それから夜道を越えて、今日はまた一日中、合戦をしていたため、人も馬も疲れ果てており、野宿ではあるが鎧兜などを枕にして誰もが前後不覚に寝込んでいた。そうした中でも総大将の源義経と、側近の伊勢三郎義盛だけは起きていた。義経は高い場所に行き、海の方を見て平家側の動きを監視しており、伊勢三郎は低地に身を潜めて万一、敵が来たならば、先ず馬の腹を射ようと待ち構えていた。

その夜に、平家軍は清盛の甥の能登守教経（ののかみのりつね）を総大将として源氏の宿营地に夜襲をかける計画があったのだが、その打ち合わせの席上で、越中次郎兵衛盛嗣と江見次郎盛方という二人の武士が「どちらが先に行くか…」で争いを始めてしまった。当時の武士は合戦に勝つことよりも「誰が一番先に敵の陣へ突入したか…」を重視したらしく、どちらも譲らない。結局は折り合いがつかないままに無駄な時間が過ぎてしまった真夜中の奇襲攻撃が出来なくなった。もし、この攻撃が成功していたならば、源義経の軍勢は壊滅しており、その後の合戦の行方に大きな影響があった筈で、やはり平家には運が尽きていた。

奇襲攻撃も出来なかった平家軍は翌日に軍船を移動させ屋島から小さな半島状の八栗山を迂回するような形で東側の志度浦へ退却した。

「那須與一のこと」余話

「弓流（ゆみながし）」では、平家方の一人の武者（源平盛衰記）では伊賀十郎兵衛家貞としているが、わざわざ船を漕ぎ寄せ船上で長刀（なぎなた）を水車のように回しながら、扇が落ちた辺りの水面をかき回すような仕草の舞を見せた。那須與一の美技に感動したからである。

これに対して源氏方では情緒も何も無く、あの武士をどうするか議論した挙句に、義経の指示を受けた伊勢三郎義盛が那須與一に命じて無残にも射殺させる。平家方では啞然として声も出ない。源氏の中にも「賛否両論」があったが、総大将が決めたことであるから、仕方なく一同が、また箭を叩いて偽りの歓声を上げた。平家方では呆れるやら悔しいやら、三人の武者が弓、楯、長刀を持って浜辺にさがり、源氏側を挑発した。

これが切っ掛けとなって、日没で中断した合戦が再び始まり（暗くて合戦にならなかったから止めたのに再開するのは不自然だが…源氏が優勢のうちに騎馬のまま海に入り、平家の軍船に立ち向かう。此の時に民謡（相川音頭）でも知られるように、義経が「…いかがつらん弓とり落とし…」てしまい、家臣が「弓よりも命の方が大事ですから…」と止めるのも聞かず危険を冒して弓を拾いあげる「弓流」の話になる。

「弓流」は大将の源義経をヨイショした嘘のように思えるが、よく考えると「那須與一」の段も、冬の北風が吹きついていたのに、與一が弓を射る段階では穏やかな春風に替わっており、神仏の

御加護を強調している。その為、この章段は神事との関わりで書かれたとする説もある。

国分学や歴史学の先生方は、平氏が信仰した厳島神社に伝わる縁起に「扇」が重要な役割をしていることに着目して（扇も高倉天皇が奉納した）平家側が「合戦の行方（勝敗）」を占ったとする説も出しておられる。北風が吹き荒ぶ小舟の上の扇的が、波打ち際の馬上から射落とせる筈も無いから安心していいのだが、それなのに那須與一が余計なことを仕出かしてしまった？

「平家物語」では触れていないが、扇的を射る役目が那須與一に決まる迄には何人かが尻ごみして断つたらしい。義経はまず、重臣の畠山重忠に命じたところ「脚氣（かっけ）ビタミシ欠乏症」で手足が痛い」と断り、苦し紛れに那須十郎を推薦したのである。呼ばれた十郎は「一の谷の合戦で右腕の臂（ひじ）を痛めた」と言つて、代りに弟の與一に譲つたらしい。仮病でも断る方が人間らしいのだが、譲られたほうは迷惑である。與一も怪我か病気で断れば良かったのかも知れない。

もう一つ「扇的」については幾つかの学説が興味深いことを挙げている。昔、中国「前漢」の時代に「蘇武（そぶ）」と言う武將が居た。この將軍が皇帝から夷敵の征伐を命じられ、敵の城九十九を攻略した。もう一つで百城が抜けるという現場で、城の中から出て来た美女があり、傍らに扇を立てて「これを射て見よ」という素振りをした。

蘇武が、それに気を取られている隙に夷敵に捕えられた。敵は蘇武の武勇を惜しんで「降伏せよ」と誘ったが、従わず十九年間も幽閉され、遂に脱出して皇帝の許に帰り、再び重職に就いた。

「那須與一の事」が蘇武の故事に依っているか

どうか、嘘か真かは別にして、読み物としては琵琶の伴奏で語るのに最適な章段と言われ、実に良く出来ている話である。

今年、ピョンピョンと飛躍を 小林幸枝

白井先生と一緒に「ことば座」を創設し今年が五年目となります。先生は変な思い込みを持っておられて、飛躍は七・五・三そして九の四段階があると云います。

ギター文化館を発信基地としてスタートし、第一段階の三年間は年間六回の公演を行ってきました。第二段階に入った昨年からは年二回の三日間公演を行っています。四年目第二段階に入った昨年は、美浦村の市民劇団「宙の会」の市川様から「陸平をヨイショする会」の主催する縄文の森コンサートへの出演のオファーがありました。先生の言うように第二段階に入った途端に良いお話をいただき、更に美浦村在住のモダンダンスの柏木様よりそのコンサートで共演してみたいとお話をいただきました。

六月公演の時に、縄文の森コンサート出演の下見に来られ、その時私の舞を見て一緒に演じてみたいと感じられたそうです。私としたらプロのダンサーの方との共演は初めてのことなので期待に胸ふくらませております。

縄文の森コンサートは、二月六日（日曜日）午後二時半から美浦村の文化財センターで行います。入場無料ですので、ぜひいらしていただけたらと思います。一月十二日から、柏木さんの舞の部

分の稽古が始まるので、今から楽しみにしています。

今年、うさぎ年でピョンピョン飛躍のできる年だそうです。私もより一層の舞のスケール感を磨き大きく飛躍できたらと願っています。それから、手話をベースにした朗読と一緒に舞うという「朗読舞」をもっと大勢の人に知っていただきたいと思っと思っています。

手話ダンスという表現がありますが、そうした表現と合わせて、もっとも手話という言語の理解を持っていただきたいと思えます。さらに言葉の感情の動作表現としての手話による朗読舞の事を多くの人に知っていただきたいと思っています。

また、今年、うさぎの飛躍の年に合わせて、これまでことば座の舞台の音楽を担当していただいていた「オカリナアートJOY」の野口善広・矢野恵子さんのコンサートをギター文化館のコンサートシリーズの一つとして白井啓治の詩の朗読と一緒に開くことになりました。ぜひ期待していただきたいと思えます。

これまでピョンピョンピョンと小さく一段ずつ階段と登ってきましたが、今年、うさぎの年なのでもう少し高く階段が昇れたらと思っております。今年もどうぞ小林幸枝の朗読舞に応援をいただきますようお願い申し上げます。

それから、私達のふる里が世界に誇れる施設である「ギター文化館」にもぜひ一度お越しいただけることを願っています。世界に一つの名品ギターの展示などもされています。

【特別寄稿】

命燃え尽きるまで オカリナアートJOY

キーボード&パーカッション

矢野恵子

今でも時々思い出す人がいます。

「Tさん」

その人は私達に生きることの素晴らしさとオカリナの素晴らしさを身をもって教えてくださいました。

今から約9年前のこと。私達は旧玉造町にある里山の古民家で演奏する機会に恵まれました。その古民家は、某帆布のバッグメーカーのギャラリ―で、そこで初めてTさんと出会いました。

Tさんは、主催者Sさんの古くからの知り合いで、以前には仕事上でも取引相手だったそうです。その時すでにTさんは中咽頭ガンを患い末期宣告を受けていました。オカリナコンサートは、SさんがTさんを元気づけようと企画したものでした。演奏終了後、Tさんはペンダントタイプのオカリナと私達のオリジナルCDを買われました。Tさんはのどに8ミリ程の穴の開いた管でスムーズ呼吸しながら「ありがとう」の手話をして嬉しそうに帰って行きました。

それから3カ月たった夏の終わりの日、私達はまたSさんの庭先をお借りしてオカリナ作りのワークショップを行ったのでした。その時再びTさんと会うことができました。今度は、奥様と娘さんを連れて参加されたのでした。

Tさんは、野球少年だった頃の写真を持参し、それをモチーフに背番号3番のこけしのようなお

カリナを作っていました。かわいらしい背番号3のオカリナはTさんの存在を永遠に残すあかしの笛であり、家族との楽しい思い出作りはあつという間に過ぎました。

それから2カ月程たったある秋の日、Tさんが入院している大学病院にお見舞いに行った時のこと、Tさんは笑顔で私達を迎えてくれました。そして、嬉しそうに背番号3のオカリナを見せるのでした。

Tさんは私達を階段の踊り場に連れて行き、のどの管にオカリナをあて、なんと曲を吹き出したのです。その曲は「アメイジング・グレイス」という曲で、踊り場中に響きわたり、音はキラキラとすべてを癒やす音色に感じとれたのでした。「ス―ス―、ピーピー」と渾身の音色、のどの管で吹いているとは思えないほどでした。その時すかさず私達はTさんにこんな提案をしてみました。

「Tさん、この病院で私達とTさんとで患者さんのためのジョイントコンサートをやりませんか！」

Tさんは筆談で「OK!」のサインをしてくれました。

それから2ヶ月たったある晩秋のこと、大学病院のロビーは松葉杖をついた人、点滴を打ちながらの人、顔中に包帯を巻いている人、ベッドに寝ながらの人などの患者さんでいっぱいになりました。もちろんTさんと私達のコンサートを心待ちにしている人達なのです。

前半は私達、後半はTさんの演奏、オカリナの音色は患者さんの冷えた心を暖かく氷を溶かすように響き、共鳴したのです。その様子は、顔の表情が明るくゆるんでいくことでよく感じとること

ができました。車いすにすわった無表情の老人が突然歌い出したり、目に涙をためている人、ロビーはアンコールがしばらくやみませんでした。その感動は、Tさんの魂の声としての演奏として患者さんに伝わったのでしょうか。わずか8ミリの穴から呼吸をしながらオカリナに息を吹き込むという事は命がけです。その後Tさんは何度か一人でガン学会などに招待されて演奏していたそうです。時はたち1年半後には入院を繰り返す、とうとうホスピスに入院したという知らせを聞きました。それは末期ガンの宣告を受け三度目の春を迎えた頃でした。私達はついに来るべき時が来たという思いで、ホスピスの病棟にTさんに会いに出かけたのでした。

Tさんの顔はむくみ、身体はやせ細りながらも、私達を笑顔で迎えてくれました。そこで私達は、「Tさんと患者さんのためのコンサートを一週間後にやろうと思います」

と話したところ、Tさんが、
「僕もやります」

と迷いのない答えが返ってきました。その時私達はTさんの強い意志を否定することはできませんでした。その一週間後、最後のジョイントコンサートが実現しました。

当日、気迫のこもった演奏に拍手は鳴りやまず、「アンコール、アンコール…」の大合唱でした。Tさんは院長先生のドクターストップも振り切り、最後まで命がけの演奏をやりきりました。その感動的なシーンは今でも目に焼きついています。

それから4ヶ月後の暑い夏の日、Tさんの悲しい知らせを聞いたのでした。Tさん、享年四十七歳。

Ｔさんとの出会いは、私達にとつて大きな影響を与えてくれました。その後、ホスピスや遺族会などで演奏する機会がある度に、必ずＴさんのことを思い出しながら演奏しています。

もし自分が不治の病になってしまった時、果たして一日一日を精一杯過ごすことができるのだろうか？ それはその時になってみないとわからないことですが、Ｔさんのように病気であることを忘れるくらい夢中になれる何かを見つけたら幸せなことだと思います。そして、これからは命の炎が燃え尽きるまで生き抜いたＴさんの思いを胸に、私達も生きていきたいと思えます。

【風の談笑室】

「光陰矢の如し」（月日の過ぎるのは、飛ぶ矢のように速い）とは良く使われる言葉である。何かを夢中して行っていたら、良きことであろうが悪しきことであろうが日の移ろいの早いことには驚かされる。何かのきっかけに己に気づいて来し方を振り返ると十年は一日のごとくに思われたりもする。

光陰とは、光は太陽と陰は月を意味し、日が昇り、沈んで月が出る。つまりその繰り返しによる月日を意味する。

光陰を用いた同義他の言葉には、：

- ・ 光陰夢の如し（月日はまるで夢を見ているがごとく、儚く早く過ぎてしまうものである。「光陰如夢 愁涙更難忍者」也（実隆公記より））

・ 光陰流水の如し（月日の移ろいの早さを流水にたとえ

て言ったもの。「げにや光陰流水の如し。花散る梢に蟬鳴きて、萩の枯枝は雪にうづもれ、年年速に暮れて……」

・ 光陰に閑守無し（時間や月日の過ぎて行くのを止める番人はいない。だから月日というのは止まることなく過ぎ去っていくものである）

・ 光陰人を待たず（移ろう年月というのは人を待つことではない）

：等がある。

昨年、母が他界したからというわけではないが、できることなら何かを夢中してやっていたら、ふと我にかえろうとしたら、とき既に死暮れていたことに気付いたなんてことがあれば、実に幸せなことだろうと思う。新春早々の話としたら相応しいものではないであろうが、年が明けて一つ歳を加えることになると思うと、ついつい己の終について考えるようになってくる。

死暮れる事に抗うという事ではない。しかし、残りの人生を数えながら、出来るだけ悔いの残すことを少なくして、存分に生を謳歌しなければならぬと考えると、今できる事、やらなければならぬこと、大げさに言えば自分でなければできないことを確りやる事を考えてしまう。やり残しのない人生なんて絶対にはないのだから、それなら出来るだけやりたい事をやって終わりにしたいものである。

だからというわけではないが、巻頭に書いたように自分の思う明日の夢、希望を残すために、したたかに反抗してやろう、反抗しなければいけないだろうと思う。

さて、来月号から、打田兄が挑戦しておられる歴史の嘘をテーマにした長編歴史物語「虚構と

真実の谷間」掲載しているかと思っている。

小生の、一度千枚を超す長編に挑戦してみてもいい作品だろうか、という話に応じて挑戦されていなければならない必然性のあるテーマを探さなければならぬのであるが、果敢に挑戦されています。打田昇三流の虚実皮膜論とでもいうべき長編歴史物語である。

現在、小生の手元に三〇〇枚ほどの原稿が届いているが実際に打田さんらしく面白い仕上がりになっていく。ただし、本会報用に構成されていないので、どのような連載にしていくなか痛めているが、どうぞお楽しみにお待ちください。そんなわけで来月号からは少し紙面が拡大されることになるだろうと思っています。

先月号に、今年から会員は足腰の立たなくなることを想定し、パソコンを覚え、会報の原稿はデータで送付するようにしようと考えている、と書いたら今月は早速、鈴木さんよりCDで原稿が送られてきた。実に嬉しく、有難いご投稿である。ところが小生の未熟さで、鈴木さんの書式設定が解除できず、とうとう打ち直すことになってしまった。小生ももう少しパソコン操作を勉強せねばと、改めて反省。（白井）

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

2011年2月6日(日曜日)美浦村:陸平遺跡・文化財センター

陸平遺跡:縄文の森に舞う小林幸枝

縄文の森コンサート(朗読舞&野口喜広オカリナ・コンサート【入場無料】)

「ことば座朗読舞公演」

朗読舞「ふるさとの風に吹かれて」(オカリナの風の声に乗って常世の国の心を舞う)

朗読舞劇「縄文の舞い」(朗読舞の小林幸枝がモダンバレエの柏木久美子と初共演)

※矢野恵子のパーカッションのリズムによって小林幸枝と柏木久美子が舞いの言葉を交わす。
世界初の舞のコラボレーションが実現。

野口喜広オカリナ・コンサート

主催:陸平をヨイシヨする会(お問い合わせ:美浦村文化財センター 029-886-0291)

ギター文化館発

「常世の国の恋物語百」

ふる里とは、物語の降る里です。ふる里に降り落ちた物語は未来への道標。守るべきは里に降り落ちた物語を確りと伝えることです。

ことば座は、里に降り落ちた物語を朗読と手話を基軸とした舞(朗読舞)に表現し、明日の夢を伝える劇団です。

2011年「ことば座」定期公演

第20回公演「常世の国の恋物語百:第27話」 6月17日~19日

第21回公演「常世の国の恋物語百:第28話」 11月11日~13日

ギター文化館協賛:ことば座新企画「里山と風の声」

《野口喜広のオカリナと白井啓治の詩の朗読コンサート》

第1回コンサート3月6日 第2回コンサート9月11日

夏の世の篝火舞 (予定) 8月28日

夏の夜空の下、篝火を焚きその灯りに照らされての朗読舞観賞会。

ことば座 315-0013茨城県石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150